今号の視点

専門性と社会を関連させた体験型学習を行う学部〈西日本編〉

大学での専門教育につなげるだけではなく、学生に社会で活躍するイメージも想起させる教育の取り組みとはどういうものか。今号では4月号に引き続き、体験型学習をカリキュラムの中心に置き、学生の意欲を伸ばしてきた西日本の大学・学部を紹介する。

体験型学習でビジネスでの理論の必要性を実感

大阪市立大商学部「キャリアデザイン論」「プロジェクトゼミナール」

◎課題意識と狙い

大阪市立大商学部では、「考える実学」を基礎に「理論と実務との融合」を目指す。この目標を踏まえ、加藤司教授は次のように話す。

「商学は実学というイメージがありますが、それでも大学での学びと実際のビジネスにはギャップがあります。大学での学びをビジネスに当てはめた時、どのようなギャップがあるのかを学生に体験させることが大切ではないかと考えました」

このような課題意識から、企業が出す課題について学生がグループで解決策を考えて提案する授業を、2007年度から始めた。それが、1年次の「キャリアデザイン論」と2年次の「プロジェクトゼミナール」だ。なぜ1・2年次に「課題解決」の授業を体験する必要があるのか。鈴木洋太郎教授は、「3年次からの専門ゼミでは本格的に理論を学びます。それまでに、実務と理論の関係性や実務を行う上での理論の重要性を理解してほしいと考えました」と説明する（図1）。

◎取り組み内容

「キャリアデザイン論」は、課題解決のための思考法やスキルを身に付けることを目的とした科目だ。11年度は2クラス開講し、1年生の約3割に当たる70人が受講した。

1クラスにつき3つの企業から課題が出され、全15コマのうち4コマずつ各社の課題に取り組む。課題は、商品のマーケティング調査やショッピングモールの集客企画など、実際の企業活動で行われているものだ。学生は5～6人で1グループを作り、課題の解決策を討議し、プレゼンテーションを行う。そして、企業とクラス担当教員が評価する。1つの課題に取り組む期間は短いが、学生が1つめの課題で失敗しても、次の課題で再挑戦してスキルを高められるカリキュラムとなっている。学生同士、学生と教員のインタラクティブ型のプログラムも特徴だ。

授業を運営する中瀬哲史教授は学生の取り組みを次のように話す。

「学生は教員が想定した以上に勉強しています。例えば、週1回昼休みに集まり、食事をしながら課

題に取り組むグループ、メンバーの下宿先に集まり夜遅くまで発表資料を作るグループなど、自発的な授業外学習につながっています」

評価のポイントは、企業に受け入れられるかどうかだけではない。提案に論理性や課題との整合性がない時は、「課題が分析できていない」「課題の解決につながっていない」など、教員やTA（＊1）による丁寧、かつ厳しい指導が入る。

「企業からの評価が高くても、論理性に欠ける提案を厳しく評価するのは、大学の学問として必要な思考のプロセスを重視しているからです」（鈴木教授）

この応用編として用意されている科目が、2年次の「プロジェクトゼミナール（以下、プロゼミ）」だ。1クラス20人以下で、11年度は前期1クラス、後期5クラスの合計6クラスが開講された。

「プロゼミは、1つの企業の事例にじっくり取り組みます。ある企業の事例では、商品の販売促進をテーマとしながらも、営業やマーケティングの面に加え、インタビューや調査を通じて製造や人事部門とのかかわりを学び、企業活動の全体像を体験させています」（中瀬教授）

◎成果と課題

1・2年次に「キャリアデザイン論」や「プロゼミ」で鍛えられ、目的意識を高く持った上で、3年次から専門ゼミを選択する学生が増えている。「理論の重要性が理解できていないと、専門ゼミで学ぶ内容の価値が分からず、学びが深まりません。1・2年次での学びを通じて、課題解決には理論の裏付けが必要だと気付くことが、自主的に学ぶ姿勢にも結び付いています」（中瀬教授）

12年度から社会人になる山本竜也さんは、「『キャリアデザイン論』で課題解決に必要な知識や理論が足りないことに気付きました。それをきっかけに、入学当初はあまり関心のなかった流通を扱うゼミに入りました」と話す。

グループワークやプレゼンテーションの経験を生かし、リーダーシップを発揮する学生もいる。12年度に4年生になる原広司さんは、学内ビジネスコンテストを立ち上げた。

「『キャリアデザイン論』での経験が、大学での積極的な学びや活動につながりました。そういう学びを用意してくれた大学に恩返しをしたい、多くの学生に同じような経験をしてほしいと思いました」（原さん）

成果がある一方、課題意識もある。

「講義型の授業よりも教員の負担が大きい授業形式であり、教員個々人の努力で支えられている部分が大きいのが現状です。学部教員の半数がかかわっている科目ですが、更に組織としてどう維持し、発展させていくのかが課題です」（加藤教授）

国際政治や国際経済を疑似体験し、専門につなげる

立命館大国際関係学部
グローバル・シミュレーション・ゲーミング

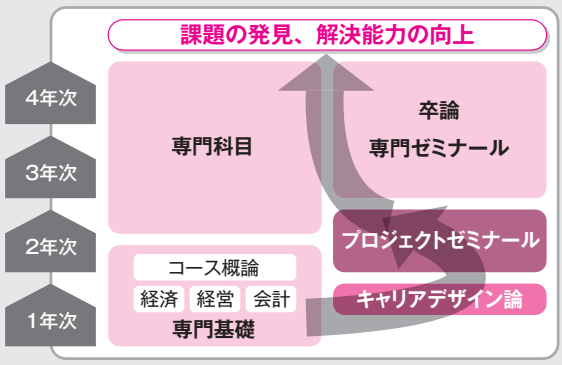
◎課題意識と狙い

立命館大の「グローバル・シミュレーション・ゲーミング（以下、GSG）」は、国際交渉を疑似体験し、国際問題の解決に挑戦する実践型の授業で、2年生全員が前期に受講する。学部創設時の1988年から形を変えながら続く、国際関係学部の名物科目だ。約300人の学生が各自の希望で20を超える国家や国連、数社のマスコミなど、約30のグループに分かれ、それぞれの役割（アクター。各国の政府や国連、マスコミなど）に扮し、半年にわたってそれぞれの立場で会議や交渉を行う。

この科目について、副学部長の河村律子准教授は次のように話す。

「国際政治や経済などへの問題意識を高め、外交の本質を学ぶと共に、交渉スキルを身に付けることが目的です。立場によって異なる多様

図1　大阪市立大　「キャリアデザイン論」と「プロジェクトゼミナール」の位置付け



従来の「専門基礎→専門科目・専門ゼミナール・卒論」という学びの流れに加え、低学年のうちに実際のビジネスに触れ、自ら理論の必要性に気付いた上で専門科目や卒論に取り組むことも可能になった

＊学校資料を基に編集部で作成

＊プロフィールは2012年3月時点のものです

＊1　Teaching Assistant の略。授業の運営の支援や補佐をする学生のこと

な視点の存在を、リアルな体験を基に学んでほしいと考えています」

◎取り組み内容

学生はあるテーマが設定された全15コマの授業を通して、自分が扮するアクターになりきり、国益や機関の方針に沿って交渉や会議を行い、国際的な合意形成を目指す（**図2**）。11年度のテーマは環境・開発問題（生物多様性と地球温暖化）で、実際に開かれた国際会議を想定した。

1～3コマ目は、学生全員が共通認識を持つためにテーマや各国の状況について同一の授業を受ける。4コマ目以降は国や機関などアクターごとのクラスに分かれ、国連での実務経験のある教員、NGOやマスコミ出身の教員から、専門的・学問的な基礎知識、外交文書のやり取りの仕方、交渉方法などの指導を受ける。

5～7コマ目では、学生は日本やフランスなどの国や国連の各機関、NGOのグループごとに、各自が扮する国や機関の研究を深め、生物多様性や地球温暖化に対しての自分たちの戦略を練る。各国・各機関の戦略は8コマ目の「アクタープレゼンテーション」で発表し、他国の戦略を踏まえて自分たちの戦略を練り直す。その上で、9、10コマ目に国同士の利害調整などの交渉を行い、全体で行う国際交渉に備える。

活動は授業時間外にも行われる。この授業を受講した木津芳夫さんは「現実の政治や国際関係を調べた上で自国の方針を立てるには、授業内だけでは時間が足りません。自主学習が前提の授業でした」と話す。

こうした学習を経て、1日を掛けてGSGの本番（11～14コマ目を使った国際交渉のシミュレーション）を行う。自国内での作戦会議、国家間交渉、合意形成の場としてのCOP（**＊2**）を3回（つまり3年分）繰り返し、各国の合意を目指す。マスコミ役のアクターは、その様子を学内にテレビ報道するなど、実際の国際会議さながらに進行する。会議の結果、決裂したまま全てが終わることもある。

「GSGで合意に至ることはまれで、利害調整がつかないまま終わることも多くあります。このようにして、学生は国際関係の難しさを体感するのです」（河村准教授）

授業運営の注意点を河村准教授はこう話す。

「自分の理想ではなく、実際の国の主張に沿って行動するように指導しています。当然、学生は理想と現実のギャップ、世界全体の利益と国益の狭間で生じる葛藤を味わいますが、これが世界の現実です。また、実際の国の主張とかけ離れていると他アクターから指摘されます。そのため、世界の状況や各国の現実の姿を研究する必要がある。これが国際関係学の学びを深めることにつながります」

GSGは本番で終わりではない。最後の15コマ目では、「なぜこのような言動をしたのか」など、具体的に全体を振り返る。受講生全員で多様な視点をより深く理解するためだ。

◎成果と課題

「一言で『国際関係学』といっても、扱う分野は多岐にわたります。学問内容を具体的にイメージできるほど、専門分野も決めやすくなります。GSGをきっかけに、学生は4年間の学びに向き合えていると思います」（河村准教授）

学部創設当初から開講しているGSGだが、毎年改善を重ねている。これまで約300人の学生に対し2人の教員で運営していたが、12年度からは10人の教員による10クラスの授業に再編するという。

「アクターごとの知識や背景をもっと深めるため、また、今までは

図2　立命館大　GSGの授業の流れ（2012年度）

授業回数	授業の流れ	内　容
1	GSG概要説明	授業内容の説明
2	テーマ講義	テーマについて全員に向けて一斉講義
3	テーマ研究報告	一斉講義を受けてテーマについて研究し、共有。その後アクター決定
4		
5	アクター研究報告	自分たちが扮するアクター（役割）の現状認識・課題設定・政策立案を行う
6		
7	ルール説明と交渉練習	交渉や国際会議のルールを押さえつつ、自国の政策検討を行う
8	アクタープレゼンテーション	自国の現状分析と、他のアクターに対して政策表明と情報収集を行う
9	ミニGSG（本番に向けてのプレ会議）	本番に向けて、二国間交渉・多国間交渉を行う
10	事前交渉と直前政策検討会	本番に向けて交渉を続けつつ、最終的な政策を確認
11	GSG本番	自国内での作戦会議、国家間交渉、合意形成としての国際会議を行い、国際的な合意を目指す
12		
13		
14		
15	全体総括	授業の振り返り

2012年度に予定されている授業の流れ。半期15コマを通して、国際政治・経済の実際を体験できる。「テーマや自国の研究→事前交渉→国際会議での折衝」という流れになっている ＊学校資料を基に編集部で作成

＊2　締約国会議（Conference of the Parties）。条約を批准した国が集まる会議

学生VOICE

知識や理論がなければ解決策の幅は広がらない

大阪市立大商学部1年
藤村亜衣
（大阪府立四條畷高校卒業）

オープンキャンパスで体験型の授業の魅力に触れて、本学の商学部に入学しましたが、1年生の夏まではあまり勉強に身が入りませんでした。「何をするために大学に入ったんだろう」と思っていた時に、夏休みのビジネスコンテストを知り、参加しました。コミュニケーションの取り方や筋道を立てた考え方を学んだものの、発表は全くうまくいかず、自分の知識の無さを思い知らされました。

もっと力を付けたいと思い、1年生の後期に「キャリアデザイン論」を受講。中瀬先生のクラスで、3つの企業の課題に取り組みました。最初の課題で高評価を得て得意になっていたら、それ以外で厳しい評価を受けたり、人件費などのコストを考慮できていなかった部分を指摘されたりと、悔しい思いもしました。「知識や理論がなくては、課題解決のプロセスは踏めても、解決策の選択肢が浮かばない」と、知識や理論を学ぶ重要性を改めて知りました。残り3年間の大学生活でもっと勉強したいと思っています。

本気の議論に刺激を受け自ら行動するように

立命館大国際関係学部2年
木津芳夫
（大阪府立住吉高校卒業）

1年生の時は英語の勉強が中心でしたが、そろそろ国際関係学の基礎を固めたいと思った頃にGSGが始まりました。生物多様性と地球温暖化について国際的合意を目指す設定で、私はノルウェーを選択。最高政策決定者になりました。ノルウェーが担う主な役割は、先進国と発展途上国との仲介です。8人のチームで、国の方針を決め、膨大な資料を読み、議論し、プレゼンテーションをし、更に他国チームの学生と多国間交渉も行って、合意に向けての戦略を立てました。

本番では、各国の議論が紛糾し収拾がつかない中、日本チームが想像を超えた視点からの提案をしたことが印象に残っています。「1つのものを作るためには準備段階が大切」と、本番前に夜遅くまで打ち合わせしたことも良い経験でした。

授業を通して本気で議論をし、活動する同級生から刺激を受けました。自分も自ら行動しなければと考え、大阪府議会議員のインターンシップに参加するなど挑戦を続けています。

評価できていなかった学生個々の主体的な活動を丁寧に評価し、主体性を発揮することも後押ししたいと考え、指導する教員を増やしました。今後も、より多くの学びの機会提供ときめ細かい運営を目指します」（河村准教授）

進路指導に生かす

体験型学習が浸透した今、手厚い指導も選択のポイントに

4月号でも指摘したように、体験型学習が「社会との接点だけでなく、専門分野を深めることにつながっているか」「4年間で体系的に組まれているか」という視点は外せない。今回の事例はそれぞれ、学部の専門教育への橋渡しだけでなく、実社会をどのように体験させるかという視点で工夫された取り組みだ。そこに、教員の指導の手厚さが加わることでプログラムの魅力が増す。既に多くの教員がかかわる大阪市立大商学部と、今後よりきめ細かい指導を目指して教員を増員する立命館大国際関係学部の姿勢は、大学選びの重要な視点になっていくだろう。

取材・編集協力：山内太地

体験型学習を行う大学 西日本編

事例以外に体験型学習を行う大学・学部を紹介

●京都産業大
「実践的PBL型教育」プログラム（O/OCF-PBL）
2・3年生を中心に、学部・学年を横断してチームを編成。企業などから提供された課題の解決に挑戦する過程を通して、大学での勉学の成果を社会で活用することを目指す。

●同志社大
プロジェクト科目
PBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）の授業科目。地域や企業の人が講師となり、プロジェクトをベースに学習を進める課題解決型の科目。実践的な問題発見・課題解決能力などの育成を目指す。

●広島大
ハーモナイゼーションPBL
学問領域を超えた混成グループが共通テーマについて討論する。初年次教育として実施し、「相手の立場で理解する能力」などを含めた問題解決能力の育成を目指す。人文社会系学生と理系学生の混成によるグループなどがある。

●島根大
総合理工学部理工特別コース
1・2年次連続のアクティブ・ラーニングセミナーと3年次の早期研究室配属を通して、入学時から継続的に理工系分野の研究面への興味・意欲、国際的視野を育む教育を行う。

＊プロフィールは2012年3月時点のものです